私が殺した少女
原寮
RyoHara

私が殺した少女

by Ryo Hara

原 寮

検印廃止

私が殺した少女

一九八九年十月十日　印刷
一九八九年十月十五日　発行

著者　原（はら）　聚（りょう）

発行者　早川　浩

発行所　株式会社　早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　東京（三二五二）三一一（大代表）
振替番号　東京・六－四七九九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・株式会社亨有堂印刷所　製本・大口製本印刷株式会社

ISBN 4-15-203416-5 C0093

私が殺した少女

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

父の霊に捧ぐ

——普通の生き方、そしてとくに普通の死に方を教えてくれた

沢崎がここに至った
最初の長篇と、四つの短篇と、
『フイリップ・マーロウ論』として書いた一つの掌篇の
読者に感謝す

登場人物

沢崎……私立探偵
真壁脩……作家
真壁恭子……その妻
真壁慶彦……その息子、中学生
真壁清香……その娘、ヴァイオリンの天才少女
甲斐正慶……真壁恭子の兄、音楽大学教授
甲斐慶嗣……その長男、ロック・ギタリスト
甲斐慶郎……その次男、レストラン経営者
甲斐慶樹……その三男、ボクシング部員の大学生
嘉村千賀子……銀座のクラブのママ
嘉村千秋……その娘
結城卓也……インテリア・デザイナー
結城きぬ子……その母
清瀬琢巳……結城の友人
阿久津隆男……オートバイ乗り
大槻茉莉子……その恋人
細野晋……阿久津の仲間
伊坂警視……本庁の刑事
加治木警部……本庁の刑事
毛利警部……目白署の捜査課長
大迫警部補……目白署の刑事
室生刑事……目白署の刑事
橋爪……暴力団〈清和会〉の幹部
相良……橋爪の用心棒
渡辺……沢崎の元パートナー、アル中の放浪者
錦織……新宿署の警部

1

夏の初めの昼下り頃だった。新緑の刺激的な匂いが、ほとんど自然を喪失しかけているこの都会にさえ充ちていた。私は、西新宿のはずれにある自分の事務所を出て、豊島区の目白へブルーバードを走らせた。午前中に受けた電話での依頼には、これと言って不審な点はなかった。男のように低い声の女が、行方の分からない家族に関することで相談したいので、真壁脩の目白の自宅まで出向いてほしいと言ったのだ。私は指定された午後二時に遅れないように、靖国通りから明治通りへ左折した。道路は混まず、外気はさわやかで、ブルーバードはいつになく快調だった。私のツキもそこまでだった。まるで拾った宝くじが当たったように不運な一日は、その電話で始まったのだ。

その一帯は所謂高級住宅地で、高級な家、高級な庭、高級な車、そして高級な飼い犬にはいくらでもお目にかかれたが、それ以外にはほとんど何もない所だった。〈学習院大学〉のキャンパスを左に見ながら目白通りの下をくぐり、教えられた目印を二、三確認すると、目ざす真壁邸はすぐに見つかった。昭和三十年代後半の高度成長時代に建てられた、薄茶色の洋館ふうの木造二階建で、そのあたりでとくに目立つというほどではないが、かなり贅沢なたたずまいだった。周囲は一メートルほどの灌木を植え込んだ石垣がめぐらしてあり、隣りの家との境界近くにぶらさがっている〝犬の糞は飼い主が始末して下さい〟という貼り紙の前に、私はブルーバードを駐車した。犬の糞に間違えられたとしても、掃き捨てられることはないだろう。三、四軒先のモダンな鉄筋三階建の家の入口付近に、フロントのバンパーがへの字に曲がった〈ヤマト〉の宅急便のバンが停まっていた。私は、この時候にしては少し厚地のサージの黒い上衣を助手席から取って、車を降りた。

真壁邸の道路に面した入口は、〝宝塚〟の大道具係が作ったように派手な真新しい白のメルヘン調の門扉だった。前庭越しに見える瀟洒な建物とはえらく不釣り合いで、家族の誰かが突然シンデレラになろうと決心したような感じだった。門柱の脇のモルタルの小さな壁に表札があって、

真壁脩の名前の下に三つの名前が並んでいた。察するところ、四人家族のうちの半分は女性らしかった。表札の下にベージュ色のインターフォンが取り付けてあった。赤いプッシュボタンを押すと五秒ぐらいの間があって、男の声で短い返事があった。

「沢崎です」と、私は告げた。「午前中の電話のお約束で、二時にうかがうことになっていた――」

「えッ、沢崎さん!?……渡辺さんじゃありませんか」同じ男の慌てたような声が応えた。

「いや、〈渡辺探偵事務所〉の沢崎です」私は、この七年間に七〇〇回以上繰り返してきた訂正を、もう一度辛抱強く繰り返した。依頼人は探偵の名前など憶えたがらないのが普通なので、どうでもいいことではあったが、この程度の面倒を嫌っていては探偵という仕事は勤まらなかった。

「わ、分かりました……ちょっと待って下さい」誰かと相談でもしているのか、インターフォンがしばらく途切れた。

「あの……すぐに門のロックを外しますから、まっすぐ玄関のほうへ入って下さい」

ウーンと唸るような電気的な音がしたかと思うと、カチッという金属音が響いた。こういう最新式の装置を取り付けていても、家族の行方が分からなくなるのを防ぐことはできないらしかった。私は門扉を押し開けてから、邸の内部に入った。

かすかに昇り勾配になった十メートルほどの石畳を歩いていくと、手入れの行き届いた欅の飾りドアのある玄関に着いた。私の到着を見越したようにドアが内側から開けられ、無精ひげを伸ばし、眼を充血させた男がドア・チェーンの向こうに顔を出した。私より五つほど年長で、四十代の後半という年配だった。彼は絶滅した爬虫類でも見るように、私の顔をまじまじと見つめた。

「渡辺探偵事務所の方に間違いありませんね」と、彼は少し震える声で念を押した。

私はそうだと答えた。いったんドアが閉まり、ドア・チェーンを外す音が聞こえ、再びドアが少し開いた。「入って下さい」という男の声が聞こえたので、私は自分の身体が通るだけドアを開けて玄関に入り、後ろ手にドアを閉めた。

建物の外見と同じように瀟洒で、しかも実用的な造りの玄関だった。よく整理された普通の玄関のように見えた。普通ではないと感じたのは、応対に出た男が玄関の奥にある磨りガラスのドア近くまで後退しているのに気づいたときだった。そういう不自然な距離をおいて、私たちはしば

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

らくお互いの顔を見つめていた。長めの髪に年齢のわりに白髪の目立つ男で、あまり陽に当たらない生活をしている人間のような土気色の不健康そうな顔をしていた。ネクタイなしの白のワイシャツに、紺の薄地のカーディガンと少し明るい紺のスラックスという恰好だった。そして、彼と私のちょうど中間の玄関の式台の上に、レンガ色の小型のスーツケースがぽつんと置かれていた。

「清香は——娘は無事でしょうね？」と、彼は訊いた。他の誰にでもなく、この私に。これ以上無言でいることには耐えられないという様子だった。別に正気を失っているようには見えなかった。

私は慎重に訊き返した。「行方の分からない家族というのは、その娘さんのことですか」

「いまさら、何を言ってるんだ！」彼は急に怒りがこみあげたように声を荒だてた。「そのスーツケースの中に、あんたのお目当てのものは入っている。頼むから、それと引き換えに娘のいるところを教えてもらいたい。金さえ手に入れたら、もう仲間たちに義理立てすることもないじゃないか。今ここで清香の居所を教えてくれたら、一生恩に着る」

言葉の最後はほとんど哀願するような口調だった。私にもいくらか事態を想像することができた。だが、想像で軽率な出方をしていいような事態ではないことも判った。とりあえずは話を私のスタート地点まで引き戻すしか方法がなかった。

「私の事務所に電話をかけてきた女性は——たぶん、女性の声だったと思うが——一体誰です？　あなたの奥さんですか。いや、その前に真壁脩というのはあなたですか」

相手の顔に戸惑いの色が浮かんだ。だが、やがて大きな溜め息をつき、落胆したような表情で言った。「真壁脩は私だ。でも、私の家内はショックで誰かに電話をかけられるような状態じゃない……とにかく、われわれはあんたたちの要求通りにしたんだ。もちろん、警察には知らせていないし、六千万円の現金も使い古しの紙幣でそろえた。そっちも約束した通りに、その金を仲間のところに運んだら一刻も早く娘の清香を返してもらいたい」

彼は数秒間私の眼の中をのぞき込むようにしていた。期待したものは何も見つからないようだった。〝退場〟の二字しか頭にない下手な役者のようにおぼつかない足取りで、彼は磨りガラスのドアの向こうへ立ち去った。玄関には、六千万円の現金が入っているらしいレンガ色のスーツケースと、私だけが取り残された。私は考えた——可能な限り

敏速に。スーツケースを手にこの邸を出て、どこかで縺れているらしい糸がぴんと張りつめるのを待つべきか、あるいは、縺れた糸をほぐすためにここに残って、自分の置かれている立場を説明すべきか……。だが、一体誰に説明しようと言うのか。実際には、そのとき私には何かを選択できる余地などまったくなかったのだ。

背後の玄関のドアの外に人の気配を感じた。振り返る暇もなく、さっき真壁脩が消えたドアから二人の男が現われた。一見して、一番会いたくないときに決まって現われる種類の男たちであることが判った。先に立っている五十才前後の中背の男は、筋張った身体を紺色の薄地のスーツに包み、ブルーとグレーのストライプのネクタイを締めていた。左の眉の中に女の乳首のように見える疣があった。間が抜けて見えないようにというつもりか、ことさら眉根を寄せて険しい顔つきをしていた。

「真壁さんに、どういう用件かね」彼は意外に穏やかな口調で訊いた。

後から出てきた三十代後半の大柄な男は、そのまま玄関の式台のほうへ降りてきた。準備しておいた大きな黒靴をすばやく履くと、私から数歩離れた位置に立った。私よりも五センチ以上は背の高いがっしりした体格で、スポーツ刈りにした頭の下に東南アジア産のまがいものの仏像のような無表情な顔があった。こちらが柔道の全国大会クラスなら、口をきいた年配のほうは剣道の県大会クラスというところだ。

「どうした？　返事を聞こうか」年配の男がきつい口調に切り替えて訊いた。それが合図だというように、背後の玄関のドアから二人の男が、玄関の奥のドアからさらにもう一人の男が現われた。いずれも黒っぽいスーツか紺色のジャンパー姿の、体力に自信のありそうな男たちだった。

「真壁脩氏に会いに来たのだ」と、私は言った。「他の誰とも話すつもりはない」

私を囲んでいる五人の男たちの輪が、急に一回り小さくなった。正面にいる年配の男が、上衣の内ポケットから出した黒い手帳をちらっとのぞかせ、憐れむような口振りで言った。

「名前は沢崎と言ったな。おまえを真壁清香誘拐の共犯の容疑で逮捕する」

たぶん、私はそのとき苦笑を浮かべていたはずだ。あまりに馬鹿げているからだった。

「これは新種の悪ふざけなのか」自分の声が自分の耳に空しく響いた。これは誰かが仕組んだ巧妙な罠に違いないと

いう気がしてならなかったからだ。
仏像のような顔の刑事が、腰のあたりからすばやく手錠を取り出して、私の右の手首に掛けた。「おまえは仲間に裏切られたんだ。いい加減に諦めて――」
「室生刑事」と、眉に疣のある上司が部下の言葉を遮った。「この男を、裏口から連行してくれ」
室生と呼ばれた刑事は、手錠のもう一方を自分の左手につなぐと、腹立ちまぎれにぐいと引っ張った。こういうことがメシよりも好きで刑事になった男なのだ。室生と二人の刑事たちに囲まれて、私は玄関から外に出された。玄関脇の木犀の植え込みの蔭を通って、私たちは邸の側面に回った。表の通りを、薄いブルーのフォルクスワーゲンに追突しそうになりながら〈ヤマト〉の宅急便のバンが走って行くのが見えた。裏の通用口が近くなったところで、私は足を止めた。
「上衣の右のポケットに、ブルーバードのキーが入っている。誰がおれの車を運んでくれる?」
室生刑事が怒りを押さえ、私の前に回って私のポケットに手を突っ込んだ。キーホルダーを取り出すと、同僚の一人にトスして渡した。
そのとき、真壁邸の勝手口のパネル・ドアが大きな音をたてて開いた。Tシャツにジーンズ姿の少年が走り出て、まっすぐに私を目がけて突進してきた。私は室生刑事と手錠でつながれていたので、咄嗟に少年をよけることができなかった。少年は私の右の脇腹に強烈な頭突きを食らわせた。室生も不意を衝かれた恰好で、私が動いたほうに腕を取られて大きくよろめいた。私は少年のそれ以上の攻撃を防ぐために、踏み込んできた彼の右足を逆に払って地面に転がした。少年はすぐに跳び起きて、執拗に私に向かってきた。だが、こんどは体勢を立て直した室生ともう一人の刑事に両腕を摑まれてしまった。それでも、足を使って私を蹴ることに必死になっていた。私は脇腹に強い痛みを感じながら、やっと一呼吸することができた。射るような視線を私に向けている彼の顔から判断すると、十四、五才の中学生ぐらいの年齢に見えた。そのわりには細くて小柄な身体つきだった。
「妹の清香に、もしものことがあったら……」少年は喉を詰まらせて激しく咳き込み、その先は言えなかった。前髪だけ少し伸ばした短めの頭の下に、まだ幼さの残っている神経質そうな顔があった。大きく見開かれた眼が、憎悪か悲しみのせいで曇っていた。Tシャツの胸にプリントされているマイケル・ジャクソンの顔が、取り抑えている刑事

たちに引っ張られて、整形手術の甲斐もなく醜く歪んで見えた。

2

目白署の留置場の壁の南アメリカ大陸を裏返したような雨漏りのしみを、ダイエットの必要がありそうなゴキブリがのろのろと縦断して行った。ここへ拋り込まれて、すでに五、六時間が経過していた。留置場に容れられたのは八年ぶりのことだった。〈渡辺探偵事務所〉の創設者であり当時のパートナーでもあった渡辺賢吾という男が起こした、一億円および覚醒剤強奪事件の、身に憶えのない共犯の容疑で勾留されて以来のことである。ゴキブリはその肥満体にもかかわらず同房者を見捨てて悠々と脱獄すると、留置場の出入口の脇の〝入監者心得〟を書いた貼り紙の下にもぐり込んだ。トラ箱の常連ならともかく、素面の人間は檻の中に閉じ込められるような経験には決して慣れることはなかった。

看守の任務についている老警官は、何かと口実をつくっ

て持ち場を離れがちだった。三つ並んだ監房の一番奥に、未成年者らしい少年が夕方から一時間ばかり留置されていたが、彼はその間ずっと声を殺して泣いていた。収容した警官の口振りでは、無免許運転で当て逃げして逮捕されたようだった。外見はともかく、心理的には私もその少年と大差はなかった。少年と入れ替わりに、まだ宵の口だというのに中年の泥酔者が収容された。その男はおよそ二時間にわたって、野球部員のうちのたった一人が起こした不祥事件のせいで、夏の甲子園大会への出場を辞退せざるを得なくなったある野球部に対する同情と、その処分に対する不満を監房の壁に向かってわめき続けた。酔っ払いの混乱した話では、その不祥事件が昨日今日のことなのか二十年前のことなのかはっきりしなかった。彼がただの野次馬なのか、不祥事件を起こした本人なのかもはっきりしなかった。言いたいことだけ言うと、男は監房の壁にもたれて高鼾で眠りこけてしまった。私たちの間にある真ん中の監房はずっと無人のままだった。

私は監房の隅にある蓋のない便器に腰かけて、六時間前に二階の取調べ室で行われた訊問のことを思い出していた。訊問を担当したのは、眉の中に疣のある目白署の大迫警部補と、本庁から出向している加治木という警部だった。彼らは、私が真壁邸を訪問した理由を繰り返し三度訊いた。私は三度答えた。訊問は微に入り細にわたってあらゆる角度から行われたが、私の答えは常に同じだった。午前中、事務所にかかってきた男のように低い声の女からの電話で「行方の分からない家族のことで相談したいことがあるので、午後二時に真壁脩の目白の自宅まで出向いてほしい」と言う依頼があった――それだけだった。

一度目は彼らはまったく私の話を信用していなかった。二度目になると半信半疑の様子で耳を傾けはじめた。そして、昨日の夕方から今日の午前中までの私のアリバイを確認した。私にしては珍しく完璧なアリバイがあった。九州にある〈藤執繪〉という骨董屋の依頼で、その店主と一緒に〝伝・宮本武蔵〟と称する軸物を羽田空港から長野県の下諏訪の買手の邸まで、空港レンタカーのベンツを使って往復輸送したのだった。その裏付けが取れたあとの三度目の訊問では、彼らの態度は困惑気味の自信のないものに変わってしまった。その直後に、この事件に関する何か新しい展開が生じたようだった。捜査官の出入りが頻繁になり、取調べ室の外が慌ただしくなったかと思うと、私はいきなりこの留置場に拋り込まれたのだった。

監房の中は少し肌寒くなってきた。初夏と言っても、五

月下旬の夜の空気はまだ冷たかった。私は脱いでいた上衣に袖を通す前に、右肘の傷を調べた。二度目の訊問の前に取調べ室を移されたとき、室生刑事が後ろから来る私にガラスのはまったドアを力まかせに叩きつけたのだ。背中で手錠を掛けられていたので、危うく顔面でドアを受け止めるところだった。予想しないことではなかったので、咄嗟に上体を捻ってかろうじて右肘を犠牲にした。私の肘はガラスを突き破って、数センチの裂傷を負った。室生は「もう中に入っていると思っていたのに」と言い、薄笑いを浮かべて謝ると、医務室からもらってきた絆創膏を三枚並べて貼りつけた。出血はすぐに止まったが、痛みはなかなか消えなかった。痛んでいたのが本当に右肘の傷だったかどうか確信は持てなかった。

私はガラスで裂けて血で汚れているワイシャツの袖をおろしてから、上衣を身につけた。留置場の出入口のドアが開いて、看守の警官が戻ってきた。彼はドアのそばのデスクについて、自分は一度も持ち場を離れたことはないとでも言うような顔でタバコに火をつけた。そして、私のほうを振り返った。

「タバコ、喫むかね。くたびれたろう？」

私はうなずいて立ち上がった。彼はアルミの灰皿を持って、私の監房に近づいてきた。定年もそう遠くなさそうな小太りの老警官で、眼鏡の奥にいつも誰かに何かを詫びているように見える小さな眼があった。彼は然るべき距離から鉄格子越しに灰皿を渡した。そして、制服の胸のポケットから〝ハイライト〟を取り出して一本抜き取り、自分の吸いさしで火をつけてから、私に渡した。私は眼で礼を言って、六、七時間ぶりの煙を吸い込んだ。フィルター付きのタバコを吸い慣れている者には解らないだろうが、両切りのタバコに較べるとなかなか煙が通ってこなかった。

「二階の捜査課はものものしい警戒態勢だが、一体何事かね？」彼は自分がその圏外に置かれていることに対する不満のこもった声で訊いた。

私は首を横に振り、タバコを灰皿にのせるとその灰皿を鉄格子越しに彼のほうへ差し出した。「私にもよく分からないんだ」

「いや、そんなつもりで言ったんじゃない」彼は灰皿の届かない位置に後退りしながら言った。「何かを訊きだして手柄にしようってわけじゃない。いいから、タバコは喫んでしまえよ。おれはただ、おまえさんみたいにきちんとしているように見える男が何をやらかしたのか分からなくて、訊いてみただけさ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co